

# 大乘としての真宗の開頭

——「誓願不可思議 一実真如海」——

小野蓮明

一

親鸞にとつて「大乘の至極」である「浄土真宗」の開頭は、思想的には『顕浄土真実教行証文類』の撰述をもつてなされたのである。

『安楽集』に云わく、真言を採り集めて、往益を助修せしむ。何となれば、前に生まれむ者は後を導き、後に生まれむ者は前を訪へ、連続無窮にして、願わくは休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海を尽くさんかためのゆへなり、と。(『教行信証』後序・原漢文・『定親全』一・三三三頁)

『教行信証』の結びにおかれた『安楽集』のこの一文は、

真実の教えに帰し、それに生きつづけた者の、真実開頭への限らない志願を語り表している。『教行信証』の後序には、大きく言つて二つのことが述べられている。その一は、最も悲憤すべき事件であつた承元の法難、すなわち専修念仏の弾圧と流罪であり、その二は、最も慶喜すべき出来事であつた「よきひと」法然の教言との値遇、すなわち「帰本願」の回心と『選択集』付属の事実が記されている。この二つの出来事は、親鸞が

仍つて悲喜の涙を抑へて由来の縁を註す。(同・原漢文・同書同頁)

と言つているように、『教行信証』製作の最も具体的な理由であつたと思われる。

親鸞はその生涯において、たび重なる念仏の教えの弾圧を体験した人である。ことに元久の法難にはじまる承元の専修念仏の停止や嘉禄の法難などが、親鸞の思想形成に大きな影響を与えたと考えられる。法然の浄土宗の独立は、当時の聖道仏教界との厳しい緊張関係の中で逐行されたのであるから、聖道仏教からの激しい批判や弾圧なしにはなされなかつたのである。法然は、一宗独立の宣言書である『選択集』の総結の文で、

それ速やかに生死を離れんと欲はば、二種の勝法の中に、しばらく聖道門を聞きて、選びて浄土門に入れ。

浄土門に入らんと欲はば、正雑二行の中に、しばらく諸の雑行を抛ちて、選びて正行に帰すべし。正行を修せんと欲はば、正助二業の中に、なお助業を傍にして、選びて正定を専らにすべし。正定の業とは、すなわちこれ仏の名を称するなり。称名は必ず生まるることを得、仏の本願に依るが故に。〔『選択集』原漢文・『真聖全』一・九九〇頁〕

と述べているが、この一文がよく示しているように、法然による浄土宗の独立は、聖道と浄土、雑行と正行という、いわゆる行々相對の形をもって逐行されたのである。そこに貫かれている精神は、選択本願への絶対的な信順であり、

選択本願に立つた廢立の精神である。しかも法然は、久しく聖道仏教が仏道実践の必須要件として掲げてきた発菩提心までも不要であると断言して、選ばれた者のみに開かれてきた聖道の諸教と完全に訣別して、時代民衆の苦惱のただなかに開かれた唯仏一道こそ、選択本願念仏の一道であることを顕揚されたのである。

法然は『選択集』念仏付属章で、

諸の往生を求むるの人、各々すべからく自宗の菩提心を發すべし。たとひ余行なしと雖も、菩提心を以て往生の業となすなり。(原漢文『真聖全』一・九七七頁)

と言いながらも、ついに

まさに知るべし、釈尊諸行を付属したまはざる所以は、即ちこれ弥陀の本願に非ざるが故なり。また念仏を付属したまふ所以は、即ちこれ弥陀の本願なるが故なり。

(中略) 諸行は機に非ずして時を失へり、念仏往生は機に当りて時を得たり。(中略) 故に知んぬ、念仏往生の道は正・像・末の三時、及び法滅百歳の時に通ずということ。(原漢文『真聖全』一・九八二―三頁)

と言い、また『和語灯録』には、

本願の念仏には、ひとりだちをせさせて助をささぬ也。助さす程の人は、極樂の辺地にむまる。すけと申すは、

智慧をも助にさし、持戒をもすけにさし、道心をも助にさし、慈悲をもすけにさす也。それに善人は善人ながら念仏し、悪人は悪人ながら念仏して、ただ生まれつきのままにて念仏する人を、念仏にすけささぬとは申す也。(『和語灯録』巻五・『真聖全』四・六八二―三頁)

と述べている。法然は、聖道の諸師たちが発菩提心をもつて浄土の網要となし、智慧・持戒などと共に菩提心がなければ往生不可能と考えたことを強く否定して、むしろそれらは一向専念の行を抑える雑行に過ぎないと廃捨して、念仏一行を衆生の往生浄土の行として選び取られたのである。その理由は、「諸行は機に非ずして時を失へり、念仏往生は機に当りて時を得たり」といわれるように、念仏一行が如来の選択本願の行であるからである。仏道実践の必須要件とされてきた智慧・持戒・道心・慈悲が、すべて「機に非ずして時を失へ」るものとして廃捨され、「本願の念仏」だけが「機に当りて時を得た」る唯一真實の行として顕揚されたのである。

法然の発菩提心不要の主張は、聖道仏教に対するばかりでなく、浄土教の祖師に対しても、その批判は鋭く厳しいものであった。

浄土の人師多と雖も、みな菩提心を勧めて観察を正と

なす、ただ善導一師のみ菩提心無しての往生を許し、観察を以ては称名の助業と判ず、当世の人善導の意にやらずは輒く往生を得ず。(原漢文・『法然上人伝全集』七七七頁)

法然は、菩提心に関しては曇鸞・道綽・懷感等に依らず、ただ善導一師に依るといふ。善導のみ菩提心なくして往生を説き、観察をもつて称名の助業となしているから、その深旨を弁えるべきことを強調するのである。それでは、善導は菩提心をどのように理解したのであるうか。

「菩提」と言ふは、即ちこれ仏果の名なり。また「心」と言ふは、即ちこれ衆生能求の心なり。故に「発菩提心」と云ふなり。(『観経疏』序分義・原漢文・『真聖全』一・四九二頁)

ただ一念を發して苦を厭ひて諸仏の境界に生じ、速に菩薩大悲の願行を満てて、生死に還り入りて普く衆生を度せんと樂ふが故に、発菩提心と名くなり。(同散善義・原漢文・『真聖全』一・五四六頁)

善導のこのような理解に立って、法然は『逆修説法』で、然に菩提心に就て諸宗の所立また各不同なり。(中略)但し導師の意は、自らまず浄土に生じて菩薩の大悲願

行を満足して、後還つて生死に入りて遍く衆生を度せ

んと欲す、即ちこの心を以て菩提心と名くなり。(『漢

語灯録』卷七・原漢文・『真聖全』四・四四二頁)

と言つて、善導の菩提心は、まず浄土に生じて菩薩の大悲願行を成就して後、生死界に還つて遍く衆生を度せんとする心である、と述べている。「善導の意に依らずば輒く往生を得べからず」と言つて、善導一師に依られた法然においても、菩提心とは浄土に往生して一切衆生を度せんとする心であった。

發菩提心とは、菩提は即ちこれ仏果の名、心はこれ衆生能求の心なり。然に諸宗の意各々これ不同なれども、みな願行ともに此土にあり。いま浄土宗の菩提心は、まず浄土に往生して一切衆生を度し、一切煩惱を断じ、一切の法門を悟つて、無上菩提を証せんと欲するの心なり。(『漢語灯録』卷七・原漢文・『真聖全』四・四四〇頁)

法然における菩提心とは、衆生無辺誓願度・煩惱無數誓願断・法門無尽誓願知(学)・仏道仏上誓願証(成)といういわゆる四弘誓願を、現在の身に実現することの不可能性の自覚から、まず浄土に往生して度・断・知・証の四弘誓願を成就せんとする願往生心であった。それはより端的

には、

浄土宗の心は、浄土に生まれんとねがふを菩提心といふ。(『和語灯録』卷一・『真聖全』四・五六三頁)

と言われたように、「浄土に生まれんとねがふ」心、すなわち願往生心であった。菩提心不要の主張は、發菩提心の仏道に立ち、それに徹底して生きようとしたにも拘らず、それに挫折し破れ去つた法然にして初めて言い得た断言である。したがつてそれは、聖道自力の菩提心の破綻を意味する言葉であつて、菩提心そのものを否定し去つていゝものではあるまい。法然において菩提心は「まず浄土に往生して、一切衆生を度し、一切の煩惱を断じ、一切の法門を悟り、無上菩提を証せんと欲する心」であつて、願往生心へと否定的に内面化され純化徹底されていったのであつて、願往生心としてはたらく菩提心までも否定したのではなかつた。願往生心としてはたらく菩提心とは、しかしいかなる意味においても、われら衆生に内在する心ではない。衆生の虚仮不実の有漏心に対するならば、それは全く超越的な無漏清浄の真実心であつて、「浄土の菩提心」(『和語灯録』卷二・『真聖全』四・六〇二頁)と言われるべきものである。

では、菩提心をこのように了解させたものは何であろう

か。それは、度・断・知・証の四弘誓願を現在のわが身に実現することの不可能性の自覚であった。そのことは、

わがごときは、すでに戒・定・慧の三学のうつつは物に  
あらず。〔和語灯録〕卷五・「真聖全」四・六八〇頁)

と叫んだ、法然のあの三学非器の自覚に読みとられることである。「智慧第一の法然房」と崇められた法然が、にも拘らず自らを「三学のうつつは物にあらず」と言い切ったのである。それは、戒・定・慧の三学や菩提心が仏道実践の基本的要件であることを充分に知りながらも、それを実践し成就せんとする主体としての自己を問題にしたとき、「わがごときは」その「うつつは物にあらず」と告白せざるを得なかつたのである。比叡の山で天台の学を修めた法然は、五性各別の側に立つ人ではなく、悉有仏性の側に立つ人であつたといわれるが、その法然が、

末法の凡夫聖を去ること時遙かにして、知識転劣にして垢穢最も深し、恒に煩惱塵勞のために縛蓋せられて、  
真如実相（仏性）顕現するに由なし。〔漢語灯録〕卷  
三・原漢文・「真聖全」四・三七六頁)

と言つて、真如実相すなわち仏性の顕現を障碍している煩惱熾盛の身の現実に深く目覚めざるを得なかつたのである。煩惱具足の凡夫としての身の実相に目覚め立つたとき、

われらは信心おろかなるがゆへに、いまに生死にとま  
れるなるべし。過去の輪転をおもへば、未来もまたか  
くのごとし。たとひ二乗の心おぼおこすといふとも、  
菩提心おぼおこしがたし。〔西方指南抄〕卷下末・「真  
聖全」四・三三〇頁)

と吐露せざるを得なかつたのである。

法然の発菩提心不要という言葉は、聖道自力の菩提心の不可能性、すなわち度断知証の四弘誓願を、現実のわが身において実現することの不可能性の証知においてのみ、言ひ得た主張であつた。したがつて法然のいう願往生心は、いかなる意味においても自らのうちに内在し、自らの起す心ではなかつた。むしろ人間の内を破つて発起する超越的な無漏清浄の心でなければならなかつた。法然にとつて菩提心とは、このような願往生心の他になかつたのであつて、願往生心の他になおも菩提心を必要とするならば、願往生心そのものの純粹性を失うことになる。なぜなら発菩提心を必要とするならば、菩提心を発す主我的な主体を認めることになり、その限り真に本願に随順するとは言えなくなるからである。阿弥陀の本願力に深く乗ずればこそ発菩提心不要と知らしめられ、発菩提心不要と知ればこそ真に本願に順するのである。法然の発菩提心不要の断言は、

このように「乗彼願力定得往生」の確かな体験から言い放された宣言であり、それはまた選択本願念仏の一行を唯仏一道と顕揚された、法然の自覚の深さと徹底を示す断言であつたのである。

二

しかしこのような法然の仏道理解や念仏運動に対して、たび重なる弾圧が加えられ、専修念仏の停止、流罪、念仏教団の解体という大事件に発展したことは、歴史の示す通りである。なかでも法然滅後『選択集』に投げかけられた、明恵の『摧邪輪』『莊嚴記』をはじめとする聖道仏教からの激しい論難は、親鸞の思想形成に少なからざる影響を与えたと思われる。明恵の論難に詳しく立ち入ることはできないが、その中心問題は、法然の菩提心撥去に対してであつた。

明恵は、菩提心撥去の過失は「発菩提心修諸功德」の聖道の立場はもとより、浄土經典における「発菩提心」の教言とも相違し、さらには法然が崇敬する浄土の祖師達にも背反する法然の独断であることを、聖道の理を尽くして論難するのである。

発菩提心は、是れ仏道の正因、是れ体声なり。専念弥陀

陀は、是れ往生の別行、是れ業声なり。汝が体を捨てて業を取るは、火を離れて煙を求むるがごとし。咲ふべし、咲ふべし。(『摧邪輪』巻上・原漢文・『鎌倉旧仏教』八〇頁)

この故に、往生の正因を出すには、菩提心を以て要路とす。称名等の諸行は、機に随つて差異あり。しかるに菩提心を以て有上小利とし、称名を以て無上大利とするは、天を以て地とし、地を以て天とするなり。何ぞそれ顛倒せるや。(同・原漢文・『鎌倉旧仏教』一〇四頁)

このような激しい論破は、ついに法然をして、「汝が邪言によつて、所化をして菩提心を捨離せしむ。汝はあに悪魔の使にあらざらんや。」(同・同書八九頁)といい、さらに「菩提心を離れては、念仏の業、成立せず。この故に、汝、聖道・浄土の二業、俱に謗じて都て所有なし。まさに知るべし、汝を最極無者と名づく。一切の有智の同梵行者、まさに共住すべからず。」(同・同書一〇二頁)と責めたのである。しかもその立論は、法然が自説の根拠とした善導の所説とも相違することを指摘して、

ただ我も念仏宗に入つて、善導・道綽等の所製を以て依憑とす。この選択集において、たとひいかなる邪義

ありと雖も、もし善導等の義に相順せば、何ぞ強ちに汝を嘖めんや。しかるに善導の釈を披閲するに、全くこの義なし。汝、自らの邪心に任せて、善導の正義を黷せり。薬を服して反つて病を成すがごとし。ただ汝が所製の集において、邪謬の疵を療するなり。(同・同書七四―七五頁)

と迫るのである。法然の立論の内側からも「善導の正義を黷せり」といい、ついに「善導を毀謗する罪人なり」(同・同書八九頁)と攻撃するのである。明恵は、善導の所論や称名念仏の立場を問題にしたのではなく、法然が往生の本願として念仏一行を選択するについて、仏道の拠つて立つ基本原理としての菩提心の撥去に対して、厳しく反論を貫かんとするのである。なぜなら明恵が自説の根拠とした『華嚴経』によれば、菩提心はまさに仏道実践の「命根」であり、したがって法然の菩提心撥去は、取りも直さず「菩薩の命根を断ず」る主張であり、「十方一切の仏宝を謗」じ「一切の僧宝を謗する」「邪見」(同・同書九二頁)に他ならなかったからである。

しかしそれにしても、法然の菩提心撥無の立場は、このような論難に何ら応える必要のない次元に開かれているように思われる。明恵の論難が一々諸経典に拠りながら論理

的実証的になされていたとしても、すでに良定が『評摧邪輪』において、「しかりと雖も破抑一分も当たらず」(『浄土宗全書』八・五八四頁)と指摘されているように、その論駁は当を得たものとは言えない。それは、明恵と法然とは、菩提心に与えた意味内容が全く違うからである。両者の最も著しい相違点は、法然が菩提心を称名以外の余行に数えて選捨したのに対して、明恵は終始「菩提心は、是れ仏道の正因、是れ体声なり」「菩薩の命根」であるといつて、仏道成立の基軸と考えた点である。「内心(菩提心)を以て正因とすべし、口称は即ち是れ助業なり」(『摧邪輪』卷上・原漢文・『鎌倉旧仏教』二六九頁)といつて、菩提心がなくして念仏の業も成就しないという明恵と、一切衆生の平等に救われる道として選択本願の念仏一行を選択した法然の立場との相違は、菩提心に与えた両者の意味内容とともに、さらに遡つて根本的な動機づけまでも考慮する必要があるであろう。

すでに述べたように、法然が余行として選捨した菩提心は、聖道自力の菩提心であった。したがって法然の発菩提心不要の断言の根底には、いかにしてもそれを自らで起こし徹底することのできない、機根の確かめがあった。菩提心を仏道の正因となしてきた仏道の歴史そのものについて

の、極めて徹底した主体における確認があったことを見落としてはならない。それに対して明恵の菩提心論は、大乘仏教の根本理念ともいふべき「一切衆生悉有仏性」の確信に立つものであったと思われる。しかし法然の浄土教は、このような確信が末法五濁の凡夫においてはいかにしても成り立ち得ないという、時機の自覚を通して開かれたものであった。『選択集』の最初に道綽の『安楽集』の文を引証して言う。

問うて曰わく、一切衆生に皆仏性あり、遠劫より以來まさに多仏に値ふべし。何によつてか今に至るまで、なほ自ら生死に輪廻して火宅を出でざるや。答へて曰わく、大乘の聖教に依るに、まことに二種の勝法を得て、以て生死を排はざるによつてなり。こゝを以て火宅を出でず。何ものをか二とする。一には謂はく聖道、二には謂はく往生浄土なり。その聖道の一種は今の時証し難し。一には大聖を去ること遙遠なるに由る、二には理深く解微なるに由る。この故に大集月藏經に云く、我が末法の時の中の億億の衆生、行を起こし道を修せんに、いまだ一人も得る者あらず。当今は末法にして現にこれ五濁悪世なり、ただ浄土の一門ありて通入すべき路なり。(原漢文・『真聖全』一・九二九頁)

「一切衆生皆有仏性」ということは、仏道成立の根本原理であり、仏教の大乘性を成り立たしめる根本前提であった。しかしいま「遠劫より以來まさに多仏に値う」べき筈にも拘らず、「今に至るまでなお自ら生死に輪廻して火宅を出でざる」という現実を知るとき、「一切衆生皆有仏性」ということは、直ちに許容し得ることではなかった。五濁悪世という「今時」の自覚より響いてくる仏言は、「我が末法の時の中の億億の衆生、行を起こし道を修せんに、未だ一人も得る者あらず」という自力修道の不可能性であった。法然の發菩提心不要の断言には、發菩提心を必須としてきた二千年の仏教の歴史の底に、修道的といわれる仏道実践のあり方自体が蔽っていた矛盾を、白日のもとに曝け出した鋭い眼と、人間における千差の行修を一挙に無に帰してしまふような、人間存在そのものへの鋭い凝視とが、秘められている。それは要するに、發菩提心による行修をもつて、仏道の成立の根本要件となす立場そのものを、否定し尽くした断言である。

明恵の法然批判は、法然の仏道確認の原点である時機の自覚が全く顧慮されることなく、専ら仏教の本質論の上からのみ論駁されているのである。しかし時機の現実に対する深い洞察と自覚なしに思想された仏道は、決して現実の



苦悩を救う力とはならない。時機の自覚を抜きにして、なおも聖道自力の行修を主張することは、末代の旨際を知らざる時代錯誤であるばかりか、末法五濁の世に生きるものにとつて、本願念仏という出離の大道を阻害するものであった。だからこそ法然は、聖道門の「解行学見」を敢て「群賊悪獸」にまで喩えて、その立場を鋭く非難して、本願念仏を唯仏一道として顕揚されたのである。発菩提心不要となす法然の不向の仏道は、徹底した時機の自覚を内実としてのみ成り立つ仏道であつて、明恵の法然批判がこのような時機の自覚を等閑視した論難であるとすれば、当然法然の立脚した信仰的自覚を踏えて法然の真意を開顕する仕事は、法然滅後の門弟の果たすべき課題であつた、といえよう。法然門下から出されたいくつかの反批判書の中で、最も深く法然の立場に立脚し、発菩提心不要の提言を承けて、「如来よりたまわりたる信心」という師法然の教言の奥義を尋ねて、ついに「如来の清淨願心の回向成就」としての信心こそ、金剛不壞の淨土の大菩提心であることとを顕らかにしたのが、親鸞の『顕淨土真実教行証文類』であるといえよう。

宗教的自覚の深化は、つねに歴史的現実に現れた時代の問題とけつして無関係ではない。歴史の現実に提起された

問題は、自己の宗教体験から批判され、しかもこの批判を通して宗教体験もまた一層自覚的論理的なものとなるからである。中国で刊行されて間もない『楽邦文類』を『教行信証』に引用するという、親鸞の鋭敏な時代関心や、あるいは一念多念、造悪無碍などの時代の問題に対する親鸞の鋭い態度を知るとき、明恵の法然批判もまた、「よきひとのおおせ」に投げかけられた論難を直ちに自身に引き受けて荷負されたに違いない。真に生きた信仰や思想は、常に現実の課題を解き、それに応える力でなければならない。

### 三

「淨土真実の教行証を顕わす」という課題を担うた『教行信証』は、親鸞が師法然の「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」という一向専念の教えに出遇つて獲得した信仰の書であると同時に、「真実の教行証」つまり真実の仏道を「淨土真宗」として開顕した書である。親鸞による淨土真宗開顕の眼は、「後序」の最初に、

竊かに以みれば、聖道の諸教は行証久しく廢れ、淨土の真宗は証道いま盛なり。(原漢文・『定親全』一・三八〇頁)

と言われているように、「行証」とか「証道」という一点

にある。つまり親鸞の関心事は、仏教の教理や思想の体系化ではなく、末法五濁の一切苦悩の群生海を救済する真実の仏道とは何か、という一点にあったといえる。末法濁世の群生海を救う仏道、それこそ法然によって興行された浄土真実の仏道、すなわち選択本願念仏の一道こそ「証道いま盛り」なる「浄土の真宗」であった。親鸞は、一切苦悩の群生海に開かれた唯仏一道の成就を、法然の選択本願念仏の教えに見開き、本願念仏の一道を「誓願一仏乗」として、群萌に開かれた大乘であることを明らかにされたのである。

それでは、親鸞において法然の本願念仏の教えが無上仏道であるということが、具体的にどのような開顕されたのであろうか。親鸞は、法然の念仏往生の教えに出遇って獲得した選択本願の行信という信仰的自覚に立って、念仏往生の教説を継承しながらも、本願の念仏をより根源的に「本願の名号」と了解し、その本願の名号を行信する道をもつて、一切苦悩の群生海に開かれた無上仏道であると顕彰されたのである。善導、法然において本願の念仏は往生浄土の行として明らかにされてきたのであるが、親鸞は選択本願の行信という信仰的自覚に立って、念仏の行を本願の名号と捉え、その名号の行信に開かれる仏道を無上仏道

として顕揚したのである。本願の名号を行信する一道こそ無上仏道であると叫ぶ、親鸞の代表的な言葉に注意して見よう。

○しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚の数に入るなり。正定聚に住するが故に必ず滅度に至る。必ず滅度に至るは、即ちこれ常樂なり。常樂は即ちこれ畢竟寂滅なり。寂滅は即ちこれ無上涅槃なり。無上涅槃は即ち、これ無為法身なり。無為法身は即ちこれ実相なり。実相は即ちこれ法性なり。法性は即ちこれ真如なり。真如は即ちこれ一如なり。〔教行信証〕証卷・原漢文・『定親全』一・一九五頁

○自力のころをすつといふは、やうやうさまざまの大聖人善悪凡夫の、みづからがみをよしとおもふころをすて、みをたのまず、あしきころをかへりみず、ひとすぢに具縛の凡愚屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、广大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなり。〔唯信鈔文意〕・『定親全』三・一六八頁

『正信偈』では、

○本願の名号は正定の業なり。至心信樂の願を因とす。

等覺を成り、大涅槃を証することは、必至滅度の願成就なり。

○能く一念喜愛の心を発すれば、煩惱を断ぜずして涅槃を得るなり。凡聖、逆誘、ひとしく回入すれば、衆水海に入りて一味なるがごとし。

○弥陀仏の本願を憶念すれば、自然に即の時、必定に入る。

○惑染の凡夫、信心発すれば、生死即涅槃なりと証知せしむ。必ず無量光明土に至れば、諸有の衆生、みな普く化すといへり。

などと言われている。

ここに「煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌」といい、「具縛の凡愚、屠沽の下類」「惑染の凡夫」などと言われているものこそ、すでに真実教である『大無量寿経』が本願の機を現すものとして語った、あの「群萌」の現実相である。いま「煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌」が「往相回向の心行を獲」ることによって「大乘正定聚の教に入る」といわれ、また「無碍光仏の不可思議の本願、廣大智慧の名号の信樂」において「具縛の凡愚、屠沽の下類」が「煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたる」といわれるのである。往相回向の心行といい、本願名号の信樂といつて

も、それは要するに如来の大悲回向に帰し、如来の本願招喚の勅命に喚び覚められた根源的な覚醒であって、一心帰命の信である。そうすると本願の名号に帰し、本願の名号に覚醒された一心帰命の信において、人は「大乘正定聚の数に入」り、「煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたる」のである。煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌を、煩惱具足のままに無上大涅槃にいたらしめ、大乘正定聚の教に入らしめる本願の名号こそ、親鸞開顕の浄土真宗なる仏道の法である。親鸞は、この本願の名号に帰するところに成就する仏道を、「誓願一仏乘」と言われたのである。

一乗海と言ふは、一乗は大乘なり。大乘は仏乘なり。

一乗を得るは、阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。阿耨菩提は即ちこれ涅槃界なり。涅槃界は即ちこれ究竟法身なり。究竟法身を得るは、則ち一乗を究竟するなり。如来に異なることましまさず、法身に異なることましまさず。如来は即ち法身なり。一乗を究竟するは、即ちこれ無辺不断なり。大乘は、二乗・三乗あることなし。二乗・三乗は、一乗に入らしめんとす。一乗は即ち第一義乘なり。ただこれ、誓願一仏乘なり。〔教行信証〕行巻・原漢文・『定親全』一・七六頁)

「行巻」のこの一文は、親鸞の真宗仏道の開顕の眼がどこ

にあつたかを語り告げている。それは、一乗、大乘としての無上仏道の開頭にあつたといえる。如来の誓願、名号に開かれる仏道を、一仏乗、大乘といつて、究竟法身を得る無上仏道であると了解したのである。親鸞は、法然の念仏往生の仏道のもつ積極的な内実をこのように尋ね当てて、本願の名号に帰する一道こそ、一切苦悩の群生海に開かれた無上仏道であり、拠るべき仏道はこれ以外にあり得ないことを、「ただこれ誓誓一仏乘なり」と言い切られたのである。

親鸞のこのような仏道の確かめは、法然が『選択集』の総結三選の文で、いわゆる行々相對の形をもつて浄土の一門を導入すべき道と決定されたのとは違つて、「ただこれ誓願一仏乘なり」という断言は、真に大乘の名に価する仏道の顕揚である。親鸞は、その誓願について、

凡と誓願について、真実の行信あり、また方便の行信あり。その真実の行願は、諸仏称名の願なり。その真実の信願は、至心信樂の願なり。これ乃ち選択本願の行信なり。その機は、則ち一切善惡大小凡愚なり。往生は、則ち難思議往生なり。仏土は、則ち報仏報土なり。これ乃ち誓願不可思議、一実真如海なり。『大無量壽經』の宗致、他力真宗の正意なり。(行巻) 原漢

文・『定親全』一・八四頁

と言つて、真宗の大綱を選択本願の行信と捉え、その行信道が「誓願不可思議、一実真如海」であり、『大無量壽經』の宗致である、というのである。また一乗海の曠積では、敬いて一切往生人等に白さく、弘誓一乗海は、無碍、無辺、最勝、深妙、不可説、不可称、不可思議の至徳を成就したまへり。何を以の故に、誓願不可思議なるが故に。(同・同書八二頁)

と言つて、弘誓一乗海の内実を「誓願不可思議」と了解されてゐる。「誓願不可思議、一実真如海」というときの「一実真如海、それは如来の智慧海である無上涅槃の世界を意味する。その如来自証の世界である無上涅槃の功徳が、如来の本願を信ずる信の一念に、わが身に生き生きと現前し現成する事実を、親鸞は深い感動を込めて「誓願不思議」と言つたのである。

弥陀のちかひのゆへなれば 不可称不可説不可思議の功徳はわきてしらねども 信ずるわがみにみちみてり  
 (『和讃拾遺』・『定親全』二・二七八頁)

不可思議とまふすは、仏の御ちかひ、大慈悲のふかきことを、こころのおよばずとまふすことばなり。こころおよばずといふことは、凡夫のこころおよばずと

まふすことにはあらず、弥勒菩薩のおむこころおよばずとなり。仏、仏とのみしろしめすべきなり、それをふかしぎとはまふすなり。〔善導和尚言〕・『定親全』三・三三八頁)

一般に不思議とか不可思議ということは、起こり得ないことが起こり、あり得ないことが事実としてあり得たことをいうのであるが、しかしそれは、ただ凡夫の心が及ばないということではない。如来の本願を信ずるわが身の上に、如来と如来自証の無上涅槃の世界が生き生きと開示される、不可思議なる事実をいうのである。

では、この不可思議なる事實は、一体何によって起こるのかといえば、親鸞は「弥陀の誓のゆえ」であると言う。弥陀の誓とは、無論阿弥陀の大悲の誓願である。「ちかひのやうは、無上仏にならしめむとちかひたまへるなり」

〔末灯鈔〕・『定親全』三・七三頁)と言われたように、苦悩の衆生のすべてを我が国に生らしめ、無上仏にならしめなければ、仏自ら仏としての正覚を取らぬと誓う、かの誓願である。親鸞の用語法によれば、不思議乃至不可思議の語は、必ず誓願・名号・仏智・他力・回向などの如来の大用を表す言葉として用いられている。しかもそのはたらきは、本願に開かれた一心帰命の信において、真如一実なる

無上涅槃の徳が、信ずるわが身の上に生き生きと開示される境遇の感動を意味する言葉である。

如来の本願を信じて一念するに、かならずもとめざるに、無上の功徳をえしめ、しらざるに広大の利益をうるなり。〔一念多念文意〕・『定親全』三・一三七頁・傍

点筆者)

安楽浄土の不可称・不可説・不可思議の徳を、もとめず、しらざるに信ずる人にえしむとしるべしとなり。

(同書・一三二頁・傍点筆者)

これらの文は、「阿弥陀如来の清浄願心の回向成就」である一心帰命の信に、如来正覚の世界である無上涅槃の徳が、「もとめず、しらざるに信ずる人にえしむ」る事實を、感動的に語った親鸞の表白である。

#### 四

選択本願の行信に開かれる仏道の内実を、親鸞は端的に「誓願不可思議、一実真如海」と捉えたのであるが、それは一実真如海という如来自証の涅槃界が、一切苦悩の群生の機に、本願に喚び覚まされた帰命の信において、生き生きと現前し現成するという、極めて積極的な仏道の了解を語るものであった。親鸞が選択本願の行信道の内実を

「誓願不可思議、一実真如海」と捉えた根拠は、恐らく『浄土論』『浄土論註』の思想、就中曇鸞の不虛作住持功徳の教説に拠るであろう。

親仏本願力 遇無空過者

能令速満足 功徳大宝海（『浄土論』・『真聖全』一・二七〇頁）

と世親が詠った不虛作住持功徳を、曇鸞は「不虛作住持功徳成就は、蓋し阿弥陀如来の本願力なり」と捉えて、

言ふところの不虛作住持は、もと法蔵菩薩の四十八願と、今日の阿弥陀如来の自在神力とに依るなり。願以て力を成ず、力以て願に就く。願徒然ならず、力虚設ならず。力願あい符ふて畢竟じて差はざるが故に成就

と曰ふ。（『浄土論註』巻下・原漢文・『真聖全』一・三三

一頁）

と云つて、如来と衆生を真に相即せしむる力用が本願であつて、本願力は「遇うて空しく過ぐるものなき」如来の大用であることを明らかにしている。曇鸞は、如来の本願力との値遇を、因位法蔵の願力と阿弥陀の果上の神力という二つの契機をもつて了解したのである。つまり因位法蔵の願力のうちに果上の阿弥陀の仏力を感じ、果上の阿弥陀の仏力のうちに因位法蔵の願力を内観されたのである。一般

には因が果を成すことは考えられても、果が因を成すことは考えられない。しかし曇鸞は、本の因位法蔵の本願によつて今日の阿弥陀仏が成仏し、阿弥陀仏の自在神力が法蔵の四十八願を自覚するということ、つまり因願と成就とは相即する矛盾の同時成立でなければならぬということ、明らかにされたのである。親鸞は、この如来の不虛作住持功徳の感得、すなわち本願力との決定的な値遇の体験を、本願力にあひぬれば、むなくすぐるひとぞなき

功徳の宝海みちみちて 煩惱の濁水へだてなし（『高僧和讃』・『定親全』二・八二頁）

と詠つたのである。

然るに愚禿釈の鸞、建仁辛の酉の曆、雜行を棄てて本願に帰す。（『後序』原漢文・『定親全』一・三八一頁）

師法然の教言との出遇いを、「本願に帰す」といって、阿弥陀の本願に喚び覚まされて、阿弥陀の願心に支えられて生きるものとなつたという、この親鸞の回心の表白は、因位法蔵の願心に喚び覚まされて果上の阿弥陀の神力に値遇し、果上の阿弥陀の神力に値遇して因位法蔵の願力を深々と内観するものとなつたという意味であろう。だから親鸞は、不虛作住持功徳の文を解して、

この文のころは、仏の本願力を観ずるに、まうあふ

てむなしくすぐるひとなし、よくすみやかに功德の大宝海を満足せしむとのたまへり。(『一念多念文意』・

『定親全』三・一四七頁)

と述べ、さらに

金剛心のひとは、しらすもとめざるに、功德の大宝そのみにみちみつがゆへに、大宝海とたとえるなり。

(同・同書一四八頁)

と言ひ、また

よく本願力を信樂する人はすみやかにとく功德の大宝海を信ずる人のそのみに満足せしむる也。如来の功德のきわなくひろくおほきにへだてなきことを、大海のみづのへだてなくみちみてるがごとしとたとへたてまつるなり。(『尊号真像銘文』・『定親全』三・八九頁)

と言つて、獲信の一念に開かれる「功德の大宝海」、すなわち無上涅槃の現前を、深い感動をもって語っているのである。

では「金剛心のひとは、しらすもとめざるに、功德の大宝そのみにみちみつ」ということは、一体どういうことであろうか。功德の大宝乃至は功德の大宝海というのは、如来の廣大無辺際なる功德の様相を表す言葉であろうが、如来の功德とは、取りも直さず『大無量寿經』に、

如来の智慧海は、深広にして涯底なし。二乗の側る所に非ず、唯仏のみ独り明らかに了りたまへり。(原漢

文・『真聖全』一・二七頁)

と教説されている深広にして涯底なき如来の智慧海であり、

如来の智慧海とは、如来所証の無上涅槃界に他ならない。

如来自証の無上涅槃界は、「唯仏のみ独り明らかに了りたまへり」と言われるように、仏と仏とのみ知ろしめす世界であつて、生死無明海の衆生にとつては、ただ不可思議として仰ぎ見る他はない世界である。その如来所証の無上涅槃の徳が、如来の本願に喚び覚まされた獲信一念の現在に、「しらすもとめざるに」「信ずる人のそのみに満足せしむる」と言われるのである。それは、親鸞のより端的な別の言葉で言えば、『正信偈』において、

能く一念喜愛の心を発すれば、煩惱を断ぜずして涅槃を得るなり。凡聖、逆謗、ひとしく回入すれば、衆水、海に入りて一味なるがごとし。(『行卷』原漢文・『定親全』一・八六頁)

と讃詠された、「不断煩惱得涅槃」という事実を指すものではあるまいか。

親鸞の「不断煩惱得涅槃」の聖言は、『浄土論註』の清浄功德成就釈において、

莊嚴清淨功德成就とは、偈に觀彼世界相、勝過三界道と言へるが故にと。

これいかんが不思議なるや。凡夫人の煩惱成就せるありて、またかの淨土に生まるることを得れば、三界の繁業畢竟して牽かず。則ちこれ煩惱を断ぜずして涅槃分を得、いづくんぞ思議すべきや。(原漢文・『真聖全』一・三一九頁)

と言われている文に由来するであろう。しかし曇鸞の場合には、煩惱成就の凡夫人が「かの淨土に生まるることを得れば、三界の繁業畢竟して牽かず」と言つて、「不断煩惱得涅槃分」の証理を淨土の徳用として了解されている。それに対して、親鸞はいま「能發一念喜愛心」と言つて、衆生に発起した信心の徳用として「不断煩惱得涅槃」を語るのである。しかし親鸞にも、次のような言葉がある。

(一)煩惱成就せる凡夫人、煩惱を断ぜずして涅槃を得しむ。則ちこれ安樂自然の徳なり。(『入出二門偈』原漢文・『定親全』二・一二二頁)

(二)必ず安樂國に往生を得れば、生死即ちこれ大涅槃なり、則ち易行道なり、他力と名づくとのたまへり。(同・同書二二三―四頁)

(三)安樂土に到れば必ず自然に、即ち法性の常樂を証すと

のたまへり。(同・同書二二五頁)

『入出二門偈頌』のこれらの文によれば、親鸞においても「不断煩惱得涅槃」の「得涅槃」や「生死即涅槃」が、淨土に往生して開かれる徳用であるかのような理解があったとも考えられる。『正像末和讃』においても

(四)眞実報土のならひにて 煩惱菩提一味なり(『定親全』二・一六九頁)

と言われている。

しかしこれらの文の場合でも、それぞれの文の直前の言葉に注意するならば、やはり信心の徳用と解すべきではないか、と思われる。たとえば、(一)の文の直前には、

如実修行相應は、名義と光明とに隨順するなり。この信心を以て一心と名づく。

とあり、(二)の文の直前には、

たとひ一生悪を造る者、三信相應せんは、これ一心なり。一心は淳心なれば如実と名づく。もし生まれずは、この処ところなけん。

と言われ、また(三)の文の直前には、

釈迦諸仏はこれ眞実 慈悲の父母なり、種種の善巧方便をもつて、我等が無上の眞実の信を發起せしめたまふ。煩惱を具足せる凡夫人、仏願力によつて撰取を獲。



この人はすなわち凡数の撰にあらず、これ人中の分陀利華なり。この信は最勝希有人なり、この信は妙好上人なり。

と述べられている。そして(四)の和讃も

弥陀の智願海水に 他力の信水いりぬれば

と前句で詠われている。これらの諸文に注意するとき、(一)から(四)までの文も、親鸞が『正信偈』で

よく一念喜愛の心を発すれば、煩惱を断せずして涅槃を得るなり。凡聖、逆誘、ひとしく回入すれば、衆水、海に入りて一味なるがごとし。(原漢文・『定親全』

一・八六頁)

正定の因はただ信心なり。惑染の凡夫、信心発すれば、生死即涅槃なりと証知せしむ。(原漢文・『定親全』一・八九頁)

と詠って、「不断煩惱得涅槃」も「生死即涅槃」も全く信心の利益であり、信心の徳と示されたことと矛盾するものではあるまい。

如來の本願力として「不断煩惱得涅槃」を語るならば、それは曇鸞の領解のように、無上涅槃の世界として浄土の徳であろう。なぜなら浄土こそ本願成就の世界として、本願のはたらきを最も具体的に証明する場であるからである。

しかし親鸞はいま、それを如來の本願に帰し、本願に開かれた真実信心の徳として捉え、獲信一念の利益として深い感動を込めてこれを語るのである。親鸞のいう信心は、言うまでもなく「阿弥陀如來の清淨願心の回向成就」としての信であった。それは、如來の本願招喚の勅命に喚び覚まされ、「欲生我國」の大悲招喚の願心に帰した根源的な覚醒であるが、如來のほうからいえば、信心とは衆生の自我心を根底より摧破して真に主体なるものとして我れに現前し現成した如來の願心の回向成就である。だからその回向成就の信心に、如來自証の功德である無上涅槃の浄土の徳が、そのままに獲信一念の現在に開き示されてくることもまた自然である。一念の信は真直に無上涅槃に直面し、無上涅槃に連なり、否、煩惱を断ずることのできないままに、願力不思議の信心の賜物として「得涅槃」の浄土の徳を今現在に生きるものとなるのである。しかし注意すべきは、「能発一念喜愛心」というとき、それはわれらが一念喜愛の心を発すというのでは決してない。われらに発起する一念喜愛の心、回向成就の信においてのみ「不断煩惱得涅槃」という事実が成り立つのである。親鸞のいう信心は、「阿弥陀如來の清淨願心の回向成就」としての信心であるがゆえに、その信心において人は、煩惱を断ずることので

きないままに、回向成就の信心の賜物として、如来自証の無上涅槃界の浄土の徳の現前現成を証知し、無上涅槃のはたらく機に転成されるのである。そのような機の転成、無上涅槃の浄土の徳用の現前を感動を込めて語ったのが、前掲の文である。改めてもう一度聞こう。

よく本願力を信樂する人は、すみやかにとく功德の大宝海を信ずる人のそのみに満足せしむる也。(『尊号真像銘文』・『定親全』三・八九頁)

如来の本願を信じて一念するに、かならずもとめざるに、無上の功德をえしめ、しらざるに広大の利益をうるなり。(『一念多念文意』・『定親全』三・一三七頁)

そして『教行信証』「証卷」に、

然るに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚の数に入るなり。

正定聚に住するが故に、必ず滅度に至る。

と云い、『唯信鈔文意』には、

ひとすぢに具縛の凡愚屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、広大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなり。

と言つて、本願の信、すなわち選択本願の行信道こそ、一切苦悩の群生海に開かれた無上涅槃道であり、群萌に開か

れた無上仏道であることが明らかにされたのである。「浄土真宗は大乗のなかの至極なり」(『末灯鈔』・『定親全』三・六二頁)という親鸞の断言は、誓願不可思議に支えられた行信道こそ群萌に開き示された唯仏一道である、という確信にもとずいて宣言されたものなのである。

(本学教授 真宗学)